命令に違反して多数の人命を救済した　杉原千畝（一九〇〇―八六）

リトアニアという国家

北欧のバルト海の東側にバルト三国と総称されるエストニア、ラトビア、リトアニアという国家があります（図１）。人口は一三三万人、一八九万人、二八〇万人で、面積もそれぞれが九州と四国を合計したほどの小国です。これら三国の東側はロシアとベラルーシ、南側はポーランドという大国に隣接する位置にあり、複雑な歴史を経験してきました。この最南に位置するリトアニアに関係する有名な人物を今回は紹介します。

図１　バルト三国

リトアニアに最初の国王が誕生したのは一二五三年とされ、一四世紀にはヨーロッパで最大の面積を領有する国家に発展します。以後、周辺の国々からの侵略などにより苦難の歴史を経験し、一九一八年にリトアニア王国、さらにリトアニア共和国として独立しますが、一九三九年にナチスドイツとソビエトが侵攻し、一九四〇年に独立を喪失します。以後、苦難の独立運動の結果、一九九一年に独立しました。

カウナスの領事代理

この一九四〇年の混乱の時期にリトアニアで活躍した杉原千畝という日本人外交官がいます。一九〇〇年に岐阜県上有知町（現在は岐阜県美濃市）の税務官吏の杉原好水の子供として誕生します。小学生時代から成績優秀で、一八年に早稲田大学高等師範部英語科予科に入学しますが、生活に困窮していたため、外務省留学生試験を受験し、一九年に官費留学生となり中華民国のハルピン学院に留学してロシア語を勉強します。

成績優秀であったため二四年には講師になり、ロシア人の女性と結婚します。流暢な言葉を駆使するため、関東軍が杉原にスパイになるように要請しますが、拒否したため、結婚したロシア人女性はソビエトのスパイであるという風説を流布され、離婚することになってしまいました。帰国して菊池幸子と再婚しますが、離婚した相手に多額の金銭を支払ったため結婚の記念写真も撮影できないほどの貧困生活での出発でした。

一旦帰国した杉原はモスクワの日本大使館に赴任する予定でしたが、前妻がロシア人であったことが影響してソビエトが杉原の赴任を拒否したため、一九三七年にフィンランドのヘルシンキにある日本公使館に赴任しました。さらに二年後の三九年八月にリトアニア共和国の臨時の首都カウナスの日本領事館（図２）に領事代理として着任します。翌月にはソビエトが隣国のポーランド東部に侵攻を開始する切迫した時期でした。

図２　カウナスにある旧日本領事館

この時期にはドイツの全権を掌握したＡ・ヒットラーがユダヤ人迫害を開始しており、多数のユダヤ人難民が極東へ避難すると予想されていました。実際、一九四〇年七月にはドイツがポーランドを占領したため、多数のユダヤ人がリトアニアにある各国の大使館や領事館からビザを取得しようと殺到してきましたが、大半の国々が大使

館や領事館を閉鎖していたため、閉鎖していなかった日本領事館にユダヤ人が殺到してきたのです。

訓令を無視してビザを発給

ポーランドでのユダヤ人の迫害状況を熟知していた杉原は殺到してきたユダヤ人の代表と話合い、数人なら自分の判断でビザを発給できるが、多数では独自に判断できないと説明し、日本の本省に「ソビエトを鉄道で横断するのに二〇日、そこから日本に移動して最大三〇日滞在して第三国に移動するビザを発給することの許可」を電報で請訓しますが「目的国の入国許可を取得している人間にのみ発給せよ」という返答でした。

しかし公邸の周囲に多数の難民が殺到している状況を目撃した杉原夫妻は本省からの訓令に違反し、領事の権限でビザを発給する決断をし、受給要件を満足していない人々にも独断でビザを発給していきました。日本の本省からは「日本を経由して第三国へ移動するリトアニア人で、必要な金銭を所持せず、第三国の許可書類がない場合は上陸を許可できない」など注意されますが無視して発行していきました。

当初は一人一人に面接し、目的国の入国許可証の有無、旅行に必要な金銭の有無を確認していましたが、大量の人々が館外に殺到している状況から時間の節約のため次々と発行し、手数料の徴集も廃止しました。また開設したばかりの領事館には印刷したビザの用紙も用意されていなかったため、すべて手書きで発行していきました（図３）。やがて万年筆が故障してペンとインクになり、閉館時間になると疲労困憊という状況でした。

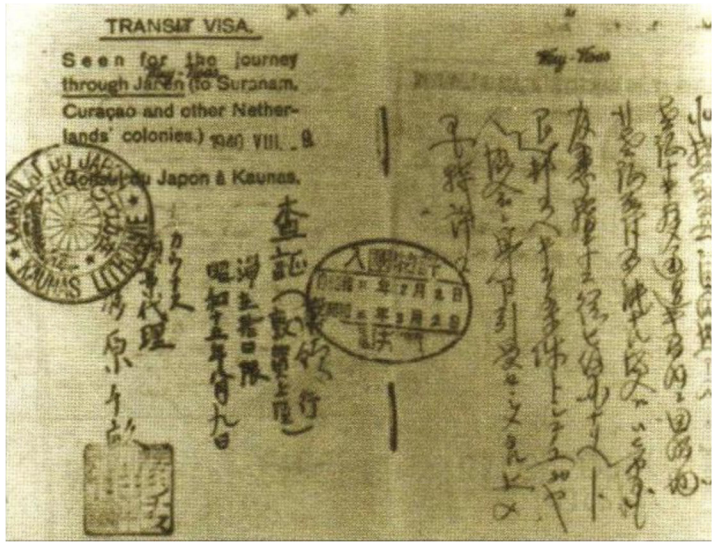


図３　手書きのビザ

ソビエトからは何度も退去命令が送付され、日本の外務省からも領事館退去命令が到達しましたが、それらを無視してビザの発行を継続していました。さらに杉原の人間性を象徴しているのは夫人の幸子に手伝わせなかったことです。万一、ドイツに逮捕された場合、手伝っていれば刑罰の対象になることに配慮したためです。約四〇〇〇人分のビザを発行して体力は限界に到達し疲労困憊でしたが、それでも継続しました。

しかし、八月二八日に領事館を閉鎖してベルリンに移動することを命令する電報が外務省から到達、ついにビザの発給業務を中止せざるをえませんでした。そこで機密書類を焼却し、荷物を整理して退去することになります。後半には時間の節約のためにビザの発行状況を記録しなかったため、正確な発行枚数は不明ですが、一枚で帯同可能な家族の人数も合計すると約六〇〇〇人分のビザを発行したと推定されています。

しかし、杉原が発行したビザを入手できたユダヤ人難民のすべてがシベリア鉄度で極東まで到達できたわけではありませんでした。外貨不足であったソビエトは高額の乗車料金を設定しており、急遽、逃避してきた人々が支払える金額ではありませんでした。乗車できない人々はドイツの軍隊に逮捕されて強制収容所に移送されて絶命しており、とりわけカウナスのユダヤ人社会は甚大な被害に遭遇したとされています。

帰国して外務省を退職

領事館の整理を終了して九月一日にカウナスから国際列車でベルリンに出発しますが、列車の到着を待機している時間にもビザを要請されて発行していました。列車がカウナスを出発するとき、何人ものユダヤ人が「バンザイ・ニッポン」という歓声とともに杉原を見送ったとされています。しかし、日本の外務省では国際関係が切迫している時期に多数の難民が日本に到来したことを迷惑とし、杉原は叱責されていました。

カウナスの日本領事館が閉鎖されて以後、杉原はフィンランドやルーマニアなどの公館で勤務しました。一九四五年の終戦とともにソビエトに身柄を拘束されますが、翌年、帰国が許可され、オデッサ、モスクワ、ナホトカ、ウラジオストックとソビエト領内を転々と移動し、ようやく四七年に博多に入港しました。しかし、リトアニア領事時代に規律違反でビザを発給したことが原因で一九四六年に外務省を退職していました。

ようやく認知された杉原の勇気

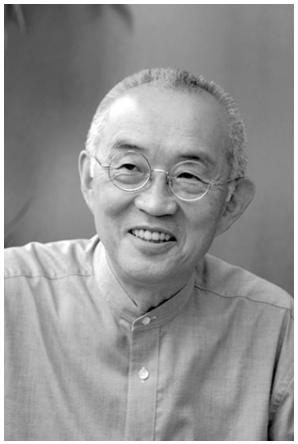
それ以後は民間の企業を転々として苦労しますが、リトアニアでの杉原の行動は日本の外務省が無視していたため社会に公開されないままでした。しかし一九六八年になって杉原の発行したビザを受給して国外に逃亡できたイスラエル大使館の参事官Y・ニシュリが杉原の連絡先を発見して面会し、さらに翌年、杉原がイスラエルで宗教大臣Z・バルハフティクに面会し、ビザ発給の真相が明確になり、大臣が驚嘆します。

しかし日本では依然として杉原の行動は公開されず、それを批判する意見が登場するようになります。ドイツの記者G・ダンプマンは著書『孤立する大国ニッポン』（一九八一）で「なぜ日本政府が杉原を表彰せず、教科書は若者の手本とせず、新聞やテレビジョンも題材としないのか」と記載しています。ようやく一九八三年にフジテレビが「運命をわけた一枚のビザ：四五〇〇のユダヤ人を救った日本人」という番組を放送しました。

一九八五年には多数のユダヤ人の生命を救出した功績で、イスラエル政府が「自身の生命を危険にしながらユダヤ人を救済した正義の非ユダヤ人」を顕彰する「諸国民の中の正義の人」として杉原を顕彰しました。このような国際社会の行動を背景に日本政府も二〇〇〇年に杉原の名誉を回復し、当時の河野洋平外務大臣が「ナチスによるユダヤ人迫害という極限的な局面で人道的で勇気のある判断をされた」と演説をしています。

外国でも様々な顕彰活動が登場します（図４）。一九九一年にリトアニアがソビエトから独立したときには、杉原が勤務していた日本領事館の前面の大通りを「スギハラ通り」と命名、イスラエルではユダヤ民族の恩人を顕彰して杉を植樹した森林公園を建設しています。現在でも国家の方針に反抗するには勇気が必要ですが、社会が緊張している戦争直前に政府や軍部の意向に反抗した杉原の人道重視の勇気は素晴らしいものでした。

図４　リトアニア発行の切手（2004）



つきお よしお　１９４２年名古屋生まれ。１９６５年東京大学部工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。２００２―０３年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『１００年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）、最新刊「ＡＩに使われる人　ＡＩを使いこなす人」（モラロジー道徳教育財団）など。モルゲンＷＥＢの連載「清々しき人々」とパーセー誌の連載「凛々たる人生 ― 志を貫いた先人の姿 ―」からの再編集版として、『清々しき人々』、『凛凛たる人生』、『爽快なる人生』（遊行社）など。